

これからの若手会

加藤 竜司



日本生物工学会には、「若手会」と呼ばれる会があります。本稿はそのご紹介とその未来についての一考です。ご存知の方にも、ご存知ない方にも、若手会について少しの時間思いを馳せていただければ幸いです。

【若手会うんちく】

実は若手会には、その興りが1965年に遡る、長い歴史があります。さらに実はもっと長い名前があります。「生物工学会若手研究者の集い」これが正式名称です。

若手会とは、実質的には年に2回の出会いの場です。

毎年夏に、全国から人が集まる合宿「夏のセミナー」があります。参加のみなさんは、身分に関わらず、友達と学会への愛着を一回り増やして下さっているようです。

また、学会本会では「総会」として、学会に参加された方々の「改めて出会える場」があります。学会参加者の、発表での本気の顔と、お酒を交わしたときの顔、の両方を発見・堪能できる場となっています。

また、「若手会」とは名打っていますが、参加者には実は年齢制限はありません。

- ・若すぎる方々（学部～修士の学生の方々）
- ・まさに若い方々（博士課程、ポスドク、社会人初期）
- ・学会的に若い方々（研究室の若手実働部隊、新進気鋭の研究者、企業の若手リーダー達）
- ・気持ち的に若い方々

まで、学生・教員、アカデミア・企業など、所属の枠を無視して、若い気持ちを持つ人は誰でも参加できるバリアフリーな会です。そして、若手会は「会」とは言うものの会費やDutyがありません。つまり、精神的つながり上の「会」なのです。

少し正体不明な感はあるかもしれません。

しかし、生物工学という分野に携わる人にとって「貴重な場」であることを是非知っていただきたい、また、「もっと貴重な場」になる可能性がある面に期待していただきたい、というのが本稿の真の主題です。

【若手会の原動力とこれから】

本年9月、前会長・馬場健史先生（大阪大学）より会

長のバトンをいただいた私ですが、もとは指導教官の先生の後押しのもと、若手会が何かも知らずに「投入された」学生の一人でした。しかし、「若手会をもっと良くしていきましょう」と前会長にお誘いを受けて以来、ただ楽しいから参加する、という対象であった若手会は、非常に大きな存在価値があると再確認しつつあります。

若手会は、フランクである良さを持つ反面、学会ほどの人の結集力はありません。若手会は勉強でないから学生は送りませんよ、という先生方もいらっしゃいます。

では、そんな会を45年近く存続してきた運営側、参加側のエネルギーはなんだったのでしょうか。私は、このエネルギーは、学会の中で大事に育てるべき「若い気持ち」だと考えます。昔も今も、この会に参加される方々に共通して見えるのは、『動機』＝（生物＋工学で何か役立つことができないかという根源的願い）と、『渴望』＝（他の学会とは違うポイントで語りあう同志を求める気持ち）です。青臭い気持ちではありますが、これは学生・教員・企業人ともに、初心に近ければ近いほど、また、将来に賭けていければいるほど、強く持つ気持ちです。これは「生物工学への愛」であり、「今の自分の仕事の先へ向かう期待」ではないでしょうか。つまり、この誰もが研究者への道で感じる「若い気持ち」を育む場は、学会が次の時代を担う活力を蓄えるためにも重要だと感じるのです。

このため、これからの若手会は、これまでの参加者の皆様のエネルギーを受け、さらに学会に対する愛と期待をインキュベーションする場として、新しい取組みとともに成長したいと考えています。今年から、①親睦から研究へつなげるシステム、②イベント以降も続けられる上下左右の関係性、③ホームグラウンドとしての場、を3つの柱として新しいイベントとWeb開設などで実行していきたいと考えています。

みなさま、是非今後の若手会の取組みを見ていただき、是非ご協力・ご参加にご協力お願いいたします。